

群 教 セ	I01 - 01
	平15.211集

「こどもの発達相談」における保育所、幼稚園との協働的な相談・療育支援をめざす試み —「すこやかサポートファイル」による情報の共有を通して—

長期研修員 福田 浩
指導主事 長島 宏

《研究の概要》

本研究は、「こどもの発達相談」において、保護者や保育所、幼稚園、本センターによる発達が気になる子どもへの協働的な相談・療育支援に向けて、子どもにかかわる上で必要となる情報を共有するためのファイルを開発し、相談業務の中で試行したものである。保護者と園の担任、相談担当の三者が子どもの課題を話し合い、ファイルでかかわり方を共有することによって、それぞれの立場を生かした協働的な支援を行うことができた。

【キーワード：発達相談 相談・療育支援 情報の共有 協働】

I 研究の背景

1 障害のある子どもの教育相談に関する最近の動向から

文部科学省調査研究協力者会議の「21世紀の特殊教育の在り方について（最終報告）」において「教育、福祉、医療、労働等が一体となって、乳幼児期から学校卒業後まで一貫した障害のある子どもとその保護者等に対する相談支援体制の整備」が提言された。提言によれば、保護者を含む子どもの関係者が「障害の状態を正確に把握」し、「子どものもつ能力や可能性を最大限伸ばしていくためにはどのように接していくのがいいのか」「どのような支援が必要であり、また可能か」といった観点で共通理解を図ることの必要性が述べられている。また、「個人情報適切な取扱いに配慮しつつ、教育・発達相談の記録をファイルするなど継続的に活用」といった一貫した相談支援体制の整備に向けた具体的な手だても述べられている。その後の「今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）」において、乳幼児期から学校卒業後までを通じて一貫して的確な教育支援を行うための手だてであり仕組みとして「個別的教育支援計画」を作成することが提言された。これらの提言を受けて、各関係機関が有機的な連携、協力をめざした取組を始めている。小笠原によれば、「教育と福祉、保健・医療、労働等が一体となる体制を地域の実状に応じて創りあげ、一人の子どもに対して、一貫性、関連性、継続性、専門性等に満ちた相談支援を工夫し、実績を重ねることが求められている」としている。そして、子どもと保護者を取り巻く関係機関の担当者同士が、子どもの「自立を目指すこと」と「子どもや保護者とともに歩む」という相談支援における基本理念をもつことの必要性を述べている。このことから、これからの相談支援としては、各関係機関が有機的な連携・協力をめざした協働的な取組がより一層望まれているといえる。

相談支援体制の整備に向けて、本県においては、障害児療育体制整備推進事業や教育相談体系化推進事業等が進められており、今年度新たに、特別支援教育サポート事業が立ち上げられた。こうした動向を踏まえ、特別支援教育センター（以下、本センター）「こどもの発達相談」においても、乳幼児期の子どもの望ましい発達を促すために、子どもとその保護者を取り巻く

保育所・幼稚園（以下、園）、保健、医療、福祉等の関係機関とよりよい連携、協力を図りながら、協働的に支援していく必要があると考える。

2 「こどもの発達相談」の現状と課題から

「こどもの発達相談」は、平成6年度に障害児教育相談事業として開設された。本センターでは、子どもの望ましい発達を促すために、発達相談の中で明らかになる子どもへのかかわり等の支援について、家庭のみならず子どもが通う園でも同様に取り組んでもらうことを期待している。また、保護者が子どもへかかわる際に自信がもてないということが生じた際に、意欲や自信をもってかかわってもらうことをも期待している。

現在の「こどもの発達相談」の相談対象は、乳幼児期の発達が気になる子どもがその多くを占めている。「こどもの発達相談」に来所する保護者の中には、園からセンターに相談に行くように勧められてくるケースが多くある。その中には、園の担当がセンターでの相談に積極的に加わり、子どもの状態像やかかわり方等について共通理解して、連携を図りながら療育支援が進められるケースもある。しかし、多くの園では、時折、保護者からセンターでの相談に関する情報を得る程度の状況にあると考えられる。一方、センター側の対応も、各園の連携・協力の姿勢に待つことが多く、子どもの望ましい発達に向けた情報発信や連携の呼びかけを積極的に行ってきたとは言い難い。

以上のような「こどもの発達相談」の現状と課題を受けて、前述したような協働的な支援の必要性から、保護者はもちろんのこと、園及びセンター等が、子どものことを「ともにはぐくむ」といった視点を持ち、子どものもつ能力や可能性を最大限伸ばしていくためにはどのように接していくのがいいのかといった情報を共有しあうことが望まれてくると考える。

そこで、本研究では、保護者を含む子どもにかかわる関係機関を行き来する、子どもの情報を共有するファイルを開発し、相談支援体制の整備に向けての第一段階として、保護者、園、本センター「こどもの発達相談」の三者による協働的な相談・療育支援を充実していくことをめざしていきたいと考えた。

II 目的

発達が気になる子どもの保護者及び保育所または幼稚園、特別支援教育センターの三者が、子どもの望ましい発達を促すために、子どもに関する情報を共有することを通して、協働的な相談・療育支援をめざす。

III 仮説

発達が気になる子どもの発達段階や特性、かかわり方などの情報を記載するファイルを開発し、「こどもの発達相談」に来所している子どもの相談や療育において、保護者及び園の担任、相談担当がファイルを用いて子どもに関する情報を共有し、それぞれの専門性を生かしながら同じ方針で協働してかかわることによって、子どもの望ましい発達を促すことができるであろう。

IV 内容及び方法

1 基本的な考え方

(1) 協働的な相談・療育支援

本研究における相談・療育支援とは、発達が気になる子どもを取り巻く保護者及び関係機関が、相談・療育を通して子どもの能力や可能性を見だし、今ある力をその生活の中で生かすことができるような働きかけをすることであると考えた。

本研究では、「共同」や「協同」ではなく、「協働」という用語を使用することとした。この用語については、発達が気になる子どもの多様なニーズに対して、保護者や各関係機関が、その子どものニーズに応じた望ましい発達を促すという共通の目的を果たすために、専門的に異なる役割や立場を積極的に生かして、協力して働きかける支援活動と定義した。また、本研究では、保護者も「協働」を行う子どもへの支援者の一人であると考えている。

(2) 情報の共有

本センターではこれまでも、保護者や園に対し、相談場面や電話等において、子どもの望ましい発達を促す上で必要と考えられる情報を伝えてきた。しかし、これまでの口頭の情報伝達では、意図したことが十分伝わらなかったことが考えられた。子どもの最低限必要な事柄で、かかわる際に最大限使える情報を文字にしてファイルに綴じ込み、それを共有することによって、同じ方針や方法で「ともにはぐくむ」といった協働的な支援を実現することが可能になるのではないかと考えた。

そこで、本研究においては、保護者や園、本センターによる相談・療育を通して提供された子どもの情報から、かかわる上で必要となる内容を分かりやすく具体的にまとめて記述していくこととした。

なお、その子どもの成長とともに、記載される情報を更新したり、新たな内容を付け加えたりする必要があると考えている。

2 「すこやかサポートファイル」のフォーマットシートの構想

具体的な情報の共有手段については、国立特殊教育総合研究所が行った「自閉症児の早期療育・教育における連携システムに関する研究」で提案された、仮称「拡大版母子手帳（試案）」の考え方や、坂井が紹介した、ある自閉症の子どもをもつ母親が考案した療育等の機関において子どもと接していく上での情報の共有手段である「サポートブック」の考え方を参考に、子どもとその保護者を取り巻く関係機関を行き来する相談・療育支援のための情報共有ファイルを「すこやかサポートファイル」とし、そのフォーマットシートを作成しようと考えた（図1）。

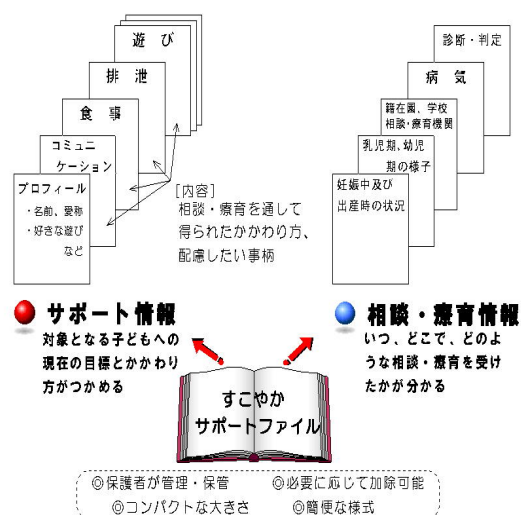


図1 「すこやかサポートファイル」の概要

(1) 機能及び内容

このファイルの構成は、「サポート情報」と「相談・療育情報」の二つに分かれる。それぞれの機能とその内容については次のとおりである。

「サポート情報」は、家庭や園で実際にかかわる場合や短期入所など子どもへのかかわりが初めての場合でも、かかわり方等のおおよその全体像をつかむことができるように、相談、療育等を通して得られた子どものプロフィールやかかわり方（コミュニケーション、食事、排泄、遊び等）、配慮したい事柄などを記述することにした。また、子どもの障害についての診断を受けて、保護者によっては、例えば、「自閉症について知りたい」といった願いが生じてくることが考えられる。子どもが通園する園にとっても同様のことが考えられる。そうした必要に応じて、障害種別の一般化された特性及びかかわり方等の資料も「サポート情報」として添付できるようにした。

次に、「相談・療育情報」は、生育歴といつ、どこで、どのような相談・療育が行われたかが分かるように、相談・療育履歴（年月、場所、診断、投薬等）を記述することにした。

(2) 記述・管理・保管

ファイルの各シートに記述するにあたっては、いずれも個人情報であり、養育者である保護者の承認を得て進めていくこととする。具体的には、「サポート情報」については、保護者の主訴や園のかかえる悩みや課題を基に、記述内容の絞り込みを行い、最終的に、保護者の承認を得て記述していくようにする。また、「相談・療育情報」については、生育歴等の個人情報であり、任意記載事項として、各項目にしたがって保護者の自主的な記述とする。ファイルの管理・保管は、保護者が行うこととする。

(3) 形態

ファイルの形態について、渥美らは、仮称「拡大版母子手帳（試案）」の検討事項として、「A4は大きすぎる」「携帯性も考慮すべき」「フォーマットはできるだけ簡素な方が記入しやすい」「フォーマットが明確な方が見やすい」「記入事項はもっと精選して少なく」などをあげている。保護者はもちろんのこと、子どもを取り巻くどの関係機関であっても、使い勝手の良さを考慮する必要があると考えられる。

そこで、上述したとおり保護者の判断で必要に応じてシートを抜き差しすることを考え、それが可能となるファイル形式とする。サイズについては、できるだけコンパクトで、保護者がバック等に入れて持ち運べる程度の大きさとして、A5サイズとする。共有する情報を書き込むシートについては、見やすさ、親しみやすさ、伝わりやすさを考慮して、イラストを用いたり様式を簡便にしたりする。

3 「すこやかサポートファイル」がめざす情報の共有モデル

乳幼児期にある発達が気になる子どもの成長は、保護者をはじめ、保育所、幼稚園や保健・医療機関、福祉機関や本センター等の各関係機関の働きかけによって支えられていると考えられる。その子どもの成長を支える関係者間を、「すこやかサポートファイル」が行き来する中で、共有された子どもの見方やかかわり方による協働的な支援を基に、子どものよりよい成長につなげることができると考える（図2）。

本研究では、子どもへの相談・療育支援として、ファイルの活用の対象を保護者、園、本センターの三者としているが、実際にこのファイルを活用する中で、子どもや保護者のニーズ等に応じて、今後、他の関係機関に協働の範囲を広げていくことも考えている。

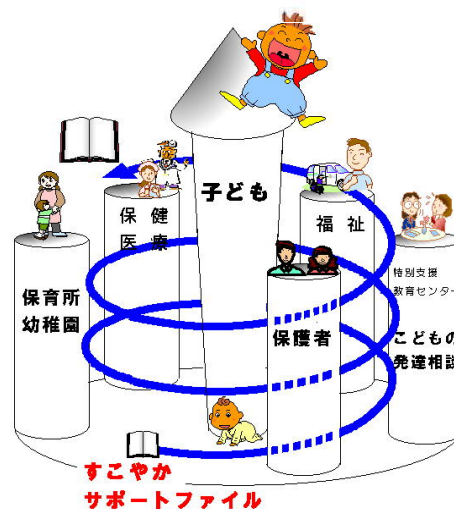


図2 ファイルがめざす情報の共有モデル

V 計画

1 「すこやかサポートファイル」開発のプロセス

「すこやかサポートファイル」を開発するにあたってのプロセスを、次のように計画した。

まず、ファイルを構成するフォーマットシートを検討、作成し、「すこやかサポートファイル Ver.1」として形づくる。次に、保護者に対してこのファイルの趣旨を説明するとともに、記載内容のすべてが個人情報になることから、このファイルを導入するにあたり保護者の了解を得るといった準備をする。保護者から了解が得られた後に、シートに記載する内容を絞り込み、保護者、園、センターの三者で情報を共有する。そして、実際にファイルによるやりとりの中で、シートの不具合等、保護者や園から聞き取ることを通して、必要があれば「すこやかサポートファイル Ver.2」に改良するとともに、そのファイルを用いて情報の共有を行う。

このように、実際の相談事例においてファイルを積極的に活用し、保護者や園の意見や感想等をフィードバックすることで、「すこやかサポートファイル」の完成版をめざすことにした（図3）。

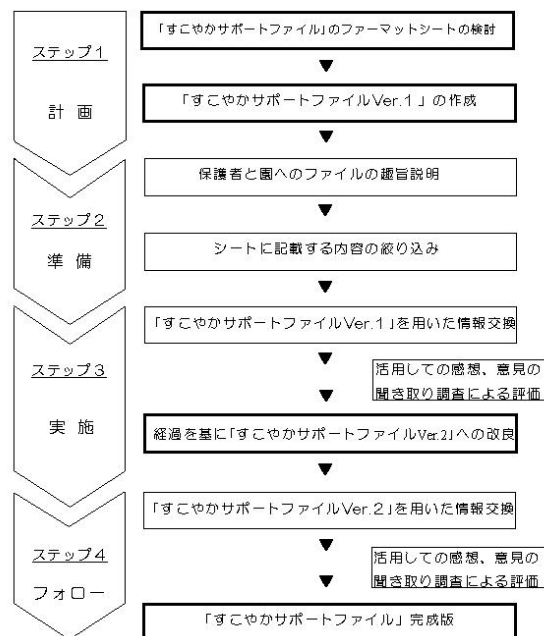


図3 ファイル開発のプロセス

2 検証計画

前述した「すこやかサポートファイル」を用いた実践事例を基に、ファイルを管理、活用する保護者と、協働的に子どもにかかわる園の担任に対し、ファイルを活用した結果を聞き取り、経過を踏まえて考察し、検証する。

なお、保護者と園の担任に聞き取る内容としては、「ファイルを使ったことのメリット」と「ファイルそのものやフォーマットシートへの要望」とする。

VI 実践

1 「すこやかサポートファイルVer.1」のフォーマットシートの作成

「すこやかサポートファイル」を実際の相談事業の中で使用することを想定して、以下のようなフォーマットシートを作成した。

(1) 全体について

「すこやかサポートファイル」への記載内容は、あくまで、目の前の子どもの理解に必要な情報とし、保護者や家庭に関する事柄は含まない。また、シートに記載される情報によっては、保護者がファイルからシートを抜き差しできるように、項立ての番号やページ番号はつけてない。さらに、できるかぎり情報が重複しないようにするとともに、関連する情報を一枚のシートにおさめるようにした。

ファイルの構成は、「サポート情報（プロフィールシート、領域別サポートシート）」と「相

談・療育情報」に分けて位置づけているが、保護者の判断によるシートの抜き差しを考慮し、シート内ではその用語を省くようにした。

(2) 「サポート情報」について

ア プロフィールシート

子どもへのかかわりのきっかけになりうる内容を「すこやかサポートファイル」の最初の1ページにまとめた(図4)。具体的な項立てとしては、ふりがな付きの「子どもの名前」に加えて、普段呼ばれている呼び名である「〇〇くん」「〇〇ちゃん」といった「子どもの愛称」が分かるようにした。また、「ママ」「お父さん」などの普段子どもに呼びかけている「親の呼び名」を入れた。さらに、子どもへの言葉かけや活動のきっかけになりうる絵本やテレビ等の「好きなキャラクター」や屋外、屋内それぞれの「好きな遊び」、「好きな食べ物(飲み物)」を入れた。最後に、「身体面で配慮してほしいこと」について載せ、子どもとの活動の中で配慮すべき事柄を意識したかかわりができるようにした。

イ 領域別サポートシート

サポート情報の領域別サポートシートにどのような内容を記載するか、保護者に伝わりやすいように、「子どもの姿に関する記載内容一覧」を作成した(図5)。具体的には、子どもの課題となる領域を「コミュニケーション」「遊び」「食事」「排泄」「着脱」「睡眠」「行動」「からだ」の8項目とした。そして、各領域において、乳幼児期に考えられる相談内容から、子どもの姿に関する課題の内容を検討し、一覧にした。

実際に領域別サポートシートに記載する情報としては、「子どもの姿に関する記載内容一覧」のすべての領域についてではなく、対象となる子どもにとって優先的な課題に関する領域に絞って記載することとした。

プ ロ フ ィ ー ル 	
子どもの名前	(ふりがな)
子どもの愛称	
親の呼び名	
好きなキャラクター	(屋外)
好きな遊び (屋外、室内)	(室内)
好きな食べ物 (飲み物)	(食べ物)
	(飲み物)
身体面で配慮してほしいこと	

図4 プロフィールシートのフォーマット

「すこやかサポートファイル」子どもの姿に関する記載内容一覧

「すこやかサポートファイル」の作成にあたっては、お子さんの課題を考えて、以下の表から必要な領域や内容を選択して記載します。

領 域	内 容
コミュニケーション	☐ 名前を呼ばれたときの反応 ☐ 伝え方(言葉、ジェスチャー、写真、実物 など) ☐ 理解の程度(人や物の名前、指示の内容 など)
遊 び	☐ 遊び方(人へのかかわり、物へのかかわり など) ☐ 遊びの切り替え (「おわり」の理解、気持ちの切り替え など)
食 事	☐ 好き嫌い(好きなもの、嫌いなものへの反応 など) ☐ 食べ方・飲み方(食器の扱い、食事時の態度、食べる量、食べる時間、飲み物の飲み方 など)
排 泄	☐ 尿意、便意 (本人の訴えの様子、おもらし時の様子 など) ☐ トイレ(付き添いの有無、介助の有無 など)
着 脱	☐ 衣服(シャツやズボンなどの着脱、靴下の着脱、前後表裏の確認、ボタンのはめはずし など) ☐ 靴(かかと部の着脱、左右の確認 など)
睡 眠	☐ 寝付き、寝起き
行 動	☐ こだわり(特定な物への執着、特定な動き など) ☐ かんしゃく(要因、状態、頻度、程度 など) ☐ 危険への意識
か ら だ	☐ 手指の使い方(つまむ、持つ など) ☐ 移動の仕方(立つ、座る、歩く など)

図5 子どもの姿に関する記載内容一覧

領域別サポートシートには、現在の子どもが見せる姿（「〇〇さん・〇〇くんの姿」と望ましいと考えられるかかわり方（「〇〇さん・〇〇くんへのかかわり方」）を対応させて記載するようにした。また、子どもが見せる姿やかかわり方を子どもの成長や変容とともに記述して積み上げていくことができるような様式にした。例えば、領域「コミュニケーション」が現在優先的な課題の一つであり、「ほしいものや行きたいところがあると大人の腕を引く」が姿として見られ、相談を通して、「『〇〇がほしかったの』と気持ちを受け止めて、本人の要求がかなうようにする」といったかかわり方が共通確認できたら、それを対応させて記述することにした（図6）。

コミュニケーション について	
〇〇さん の姿	〇〇さん へのかかわり方
・ほしいものや行きたいところがあると大人の腕を引く。	・「〇〇がほしかったの」と気持ちを受け止めて、本人の要求がかなうようにする。
15年4月1日 駄	
年 月 日 駄	

図6 領域別サポートシートのフォーマット

(3) 「相談・療育情報」について

相談・療育情報のフォーマットシートについては、「生い立ち」という名称とし、現在、「こどもの発達相談」で使用している生育歴の用紙にある内容をベースに作成した。この情報により、子どもにかかわる人にとって、子どもの発達を理解したりその後の具体的な支援等に役立てたりすることができると考えた。また、この情報は、個人情報として、必要に応じてシートを抜き差しすることができるように、一つのシートに1項目または関連した項目をまとめ、片面刷りにした。具体的には、「妊娠中及び出産時の状況について（図7）」「乳児期の様子について、幼児期の様子について（図8）」「在籍園、学校について、相談・療育機関について（図9）」「病気について（図10）」「診断・判定について（図11）」とした。

なお、保健・医療に関する情報としては、病気と診断・判定について、保護者が入手可能な範囲の情報を保護者の判断に基づいて記載できるようにした。

生 い 立 ち	
年 月 日 記入者名	
お子さん の 名前	男・女 生年月日 平成 年 月 日
◎ 妊娠中及び出産時の状況について ○妊娠中の健康状態 異常 ・なし ・あり→・切迫流産・妊娠中毒・性器出血 ・前置胎盤 ・貧血 ・その他（ ） ○出産時の母親の年齢 歳 ・初産 出産した病院名 産婦人科 ・経産 病 院 ○陣痛から出産までの時間 時間 妊娠期間 週 ○出産の状態 ・正常分娩 ・鉗子分娩 ・吸引分娩 ・骨盤位 ・帝王切開 ・微弱陣痛 ・前早期破水 ・促進剤 ・臍帯巻絡 ・窒息 ・仮死 ・その他（ ） ・保育器に入った（ 日） ○出生児体重 g ○黄疸 ・ふつう ・強い（光線療法 交換輸血 その他） ○すぐ泣いた ・はい ・いいえ（ 分後） ○その他の異常（ ）	

図7 「妊娠中及び出産時の状況について」のフォーマット

◎ 乳児期の様子について

○ お子さんの栄養状態 ① ・母乳 ・人工乳 ・混合
② ・よく飲んだ・ふつう・あまり飲まなかった

○ 普段の様子 ・ふつう ・並いてばかりいる ・おとなしく寝てばかりいる

○ 目で物を追う__月 ○ あやすと笑う__月 ○ 頭のすわり__月

○ 寝返り__月 ○ 独り座り__月 ○ はいはい__月 ○ 独り立ち__月

○ 人見知り ・あった(__月) ・なかった

○ 離乳の開始__カ月～ 終了__歳__カ月

○ 1歳半健診の様子 受けた機関(保健センター・ 病院・)
内容()

◎ 幼児期の様子について

○ おむつはとれましたか ・はい(__歳 __月頃) ・いいえ

○ 自分の名前を言えますか ・はい(__歳 __月頃) ・いいえ

○ スプーンで食べられますか ・はい(__歳 __月頃) ・いいえ

○ 階段の上り下りができますか ・はい(__歳 __月頃) ・いいえ

○ 二語文が言えますか ・はい(__歳 __月頃) ・いいえ

○ 近所に遊べる友達がいいますか ・はい(__歳 __月頃) ・いいえ

○ 3歳児健診の様子 受けた機関(保健センター・ 病院・)
内容()

図8 「乳児期の様子について、
幼児期の様子について」のフォーマット

◎ 在籍園、学校について

期 間	保育所、幼稚園名・学校名	担 任 名
平成__年__月 ～ 平成__年__月		
平成__年__月 ～ 平成__年__月		
平成__年__月 ～ 平成__年__月		

◎ 相談・療育機関(保健センター等)について

期 間	相談・療育機関名	受けたサービス
平成__年__月～ 平成__年__月		相談・療育・生活指導 その他()
平成__年__月～ 平成__年__月		相談・療育・生活指導 その他()
平成__年__月～ 平成__年__月		相談・療育・生活指導 その他()
平成__年__月～ 平成__年__月		相談・療育・生活指導 その他()

図9 「在籍園、学校、相談・療育機関」
のフォーマット

◎ 病気について

○ 今までにかかった大きな病気

年 齢	病 名	かかった病院	入院日数及び処置

○ 現在治療を受けている病気

いつから	病 名	病 院	投薬及び制限等

図10 「病気について」のフォーマット

◎ 診断・判定について

○ 今までに受けた診断

年 月	診 断 名	機 関 名

○ 所持している手帳(身障手帳、療育手帳等)

取得年月	手帳の名称	判 定

図11 「診断・判定について」のフォーマット

2 「すこやかサポートファイルVer.1」を活用した実践事例

「こどもの発達相談」において、二つの相談事例の中で、「すこやかサポートファイル Ver. 1」を用いた実践をもとに考察した。いずれの事例も、保護者が子どもの通う園から本センター「こどもの発達相談」を勧められているとともに、相談を始めるにあたり、園から「協力して取り組みたい」という事前の連絡を受けている。

(1) 事例 1

ア 対象について

本児は、今年度の4月から保育園に通い始めた年少児である。受理面接時における家庭の悩みや心配事は、「特定のことば以外意味のあることばを言わない」「偏食が激しい」であった。相談を進める中で、保護者から、本児が園の給食を食べないので、弁当を持参するようにしたが、それもあまり食わず、園の担任も食器をかえたり食べ物を少量ずつ食べるよう促したりしたが、解決に向かわないでいるという話があった。

相談担当が、家庭の了解を得て、園を訪問して担任の悩みや心配事を聞いた。園としての現在の悩みや心配事は、やはり昼食が食べられなかったり食べられる量が少なかったりすることであった。

イ 「すこやかサポートファイル」活用の概要

(ア) 三者での話し合い

子どもの課題について保護者と園の担任と相談担当の三者で話し合い、共通の見方や手だてでかかわることができるようにするとともに、その見方や手だてを「すこやかサポートファイル」に載せて共有することになった。話し合いの結果、課題は「食事」「遊び」「コミュニケーション」の三つの領域に絞られた。具体的に、食事については、偏食をなおしたり嫌いな食べ物を食べられるようにしたりするよりは、食事のときの不安な気持ちを取り除くことができ、「もっと食べたい」という気持ちをほぐくめるように、「好きな食べ物をお弁当に入れる」「おかずは前の日と同じにしない」「弁当の量を少なめにする」「集団から離れてでも食べられることを優先する」といったかかわり方を確認し合えた。また、「もっとこうしたい」という要求行動は、食事だけでなく、遊びの場面等においても少ないことから、遊びの場面でのかかわり方や生活全般のコミュニケーションについて、好きなことを見つけたり本人の気持ちを受け入れたりするかかわり方が望ましいのではないかとということが話し合われた。

(イ) 話し合いを生かした各シートの作成

三者での話し合い後、保護者と相談担当との面談の中で、共有する情報として、子どもの姿とそれに対するかかわり方を保護者とともに確認しながら、ファイルのサポート情報の領域別サポートシートに記述した。記述するにあたって、例えば、遊びについて「要求していた遊びは、できるかぎり止めないで、認めるようにする」としたが、保護者から「用事があったり時間的な制約があったりすると、遊びをやめざるをえず、どこまで本人の気持ちを大切にしたらよいか難しい」という疑問が出された。これに対し、「やむをえない時もあるが、大人がそばにいてかかわって遊ぶことを、今は何より大切に考えていってはどうか」「普段から『おわり』という言葉を活動の終わりに意識して使っていってはどうか」という補足をした。なお、プロフィールシートや相談・療育情報のシートについては、家庭で記述してほしいことを伝えるとともに、とりわけ、相談・療育情報は、個人情報であるので、家庭の判断で必要と考えられるときに提示できるようにしていってほしいことを伝えた。その後、領域別サポートシート及びプロフィールシートについては、保護者が園の担任に提示し、記述した内容を共有した。

ウ 結果と考察

(ア) かかわり方の共有による子どもの変容

「すこやかサポートファイル」による子どもの情報を共有し始めて2カ月が経過した頃、相談の中で保護者から「最近、園で食べるようになってきた」という報告を受けた。保護者に了解を得て、園の担任に最近の様子を聞いたところ、「集団から離れてでも食べられることを優先」した対応をとってきた結果、以前より食べられるようになってきており、加えて、自分から友達と同じテーブルで食べようとする姿が見られるようになってきているとのことであった。

こうした子どもの変容について、保護者と園の担任とのやりとりを聞いたところ、園が用意した独自の連絡ノートを用いたやりとりの中で、双方が必ず、食事や遊びなど三者で話し合った課題を話題にしたとのことであった。このことから、ファイルによる情報の共有をきっかけに、子どもへかかわる人が、同じ方針や方法に基づくかかわり方を日常的に意識して実践したことで、子どもの変容につながったと考える。すなわち、三者で話し合い、そして、ファイルでかかわり方を共有し、保護者と園の担任が日常的な働きかけを行ったという協働的な支援は、有効であったと考える。

(イ) 「すこやかサポートファイル」について

保護者が提示した「すこやかサポートファイル」について、園の担任から「記述された内容が分量的に少ないと感じた」という感想があった。このことから、ファイルのことを保護者と園と相談担当とがそれぞれの考えや子どもの様子について連絡を取り合う連絡ノートというような受け止めがあったことが推察できた。しかし、「絞って記述してあるので保護者にとっては、やるべきことが分かりやすいのではないか」という担任からの感想を受けた。本事例では、保護者と担任とのやりとりとして、園独自の連絡ノートを使っていたが、毎日のやりとりのためのファイルではなく、子どもの課題として「今は、ここに力を入れている」ことが分かるファイルとして受け止めてもらえたと判断することができた。現在のファイルやファイル内の各シートについて、保護者と園の担任からの「こうしてほしい」という要望はなかった。

(2) 事例2

ア 対象について

本児は、今年度の4月から保育園に通い始めた年中児である。受理面接時における保護者の悩みや心配事は、「偏食がある」「おもつがまだ取れない」「言葉がほとんど出ない」であった。

イ 「すこやかサポートファイル」活用の概要

(ア) 三者での話し合いと各シートの作成

保護者の主訴や園での様子を基に、保護者と園の担任、相談担当との三者で話し合った。話し合いの結果、「園では食べられるのに、家庭では顔を背けたり逃げてしまったりして食べない」といった食事についての課題があげられた。話し合いの中で、園の担任から、食事の担任のかかわり方について、本児が食べることを拒んでも、すぐにあきらめなくて、食べ物を少量ずつ食べるよう何度か繰り返して働きかけることでうまくいくことがあるので、保護者に参観してもらいかかわり方を参考にしてもらってはどうかという提案があった。話し合い後に、保護者から、園で食事場面（おやつ）を見せてもらった報告を受けた。そして、家庭でも同じようなかかわり方が可能かどうかを聞く中で、「大人が少量の食べ物を口まで運び、食べるよう何度か繰り返し働きかける」ことをファイルの領域別サポートシートに記述することになった。その後、領域別サポートシート及びプロフィールシートについて、保護者が

園の担任に提示し、記述した内容を共有した。

(イ) 話し合い後に書き加えた課題についての情報の共有

三者での話し合い後の相談の中で、小便、大便をオムツにしてしまうことが多く、トイレまで我慢できないという排泄の課題を話合った。小便については、我慢してためておけるようになってきており、園では我慢していて、帰宅後にするのが習慣化してきた。また、大便については、その処理を母親がすべて行っていた。こうした姿を受け止め、話し合いの結果、成功体験を大切にするとともにトイレという場所を意識づけるために、「小便は、タイミングよくトイレでできたとき、大いにほめるようにする」「おむつにした大便を本人と一緒にトイレで流すようにする」ことを領域別サポートシートに記述することになった。そして、排泄について、園での協力依頼も含めて、園へファイルの提示を促した。

ウ 結果と考察

(ア) かかわり方の共有による子どもの変容

ファイルを活用し始めて3カ月が経過した頃、保護者から子どもの姿について、次のような報告があった。

まず、食事については、連休など生活のリズムの変化により一時期食事のリズムが乱れ、園においてもなかなか食べてくれなかったが、継続して取り組んできたところ、以前に比べると食べられるようになってきている。家庭でも朝のみそ汁について、少し踏み込んで食べるように促し始めた。食べることを拒むときもあるが、自分から食べようとする姿も見られるようになってきた。

また、排泄については、登園後、保護者が一緒にトイレに行くようになってきたところ、最近、便座に座って小便や大便をすることができるようになってきた。また、園で昼寝の後、担任と一緒にトイレで小便をすることができるようになってきた。

こうした子どもの変容について、園の担任からこれまでの取組の様子を聞いた。その結果、本事例も事例1同様、園独自の連絡ノートを使っていたが、保護者とのやりとりは主に送り迎えのときに、日常生活全般の話を行っていた。その中で必ず、食事や排泄など三者で話合った課題を話題にしてきたとのことであった。

以上のことから、三者の話し合い、そして、ファイルで共有したかかわり方を、かかわり手が日常的に意識して実践してきたことで、子どもの変容につながったと判断できた。すなわち、協働的な働きかけは有効であったと考える。

(イ) 「すこやかサポートファイル」について

保護者が提示したファイルを見た園の担任から「食事のところも、園の方でもやっていることなのでよかったと思う」という感想があった。また、事例1同様、現在のファイルやファイル内の各シートについて、保護者と園の担任からの「こうしてほしい」という要望はなかった。ただ、上述したように、子どもの変容から考えると、子どもにかかわる情報を絞り込んでファイルに記述し、共有してきたことで、子どもへのかかわり方を意識する上で有効であったと考える。

なお、対象児の変容を受けて、特に登園後の排泄ができるようになり習慣化してきている姿を成長した姿と受け止め、シートの次の枠に記述するよう促すとともに、これまでのかかわり方は、継続することを保護者と確認した。

3 「すこやかサポートファイルVer.2」への改良とその活用

事例1、事例2の実践において、「すこやかサポートファイル」の活用頻度が少ないこともあり、保護者及び園から、現時点でのフォーマットシートについての具体的な要望はなかったが、今後、「こどもの発達相談」の相談業務においてより広く活用することをめざす上で、「す

こやかサポートファイル Ver.1」の見直しを行った。そして、ファイルを紹介する保護者向けリーフレットを作成し、園との連携が期待できる保護者に使用を呼びかけた。

(1) 「プロフィールシート」の改良

事例1、事例2の相談の中では、領域別サポートシートに記述した内容が中心的な話題であった。その際、課題への取組に合わせて子どものめざす姿も話題になっていた。しかし、先に作成したフォーマットシートの中に、優先的に取り組んでいる課題に対するめざす姿や目標について記載できる枠を設けていなかった。

そこで、各シートを見直す中で、子どもにかかわる関係者が変わっても継続したかかわりができるように、また、現在かかわる関係者がより一層子どものめざす姿を意識することができるように、プロフィールシートの中に「いまのもくひょう」として位置づけることにした(図12)。なお、「いまのもくひょう」もかかわり方と同様、成長とともに更新していくことにした。

プ ロ フ ィ ー ル	
子どもの名前	(ふりがな)
子どもの愛称	
親の呼び名	
好きなキャラクター	
好きな遊び (屋外、室内)	(屋外) (室内)
好きな食べ物 (飲み物)	(食べ物) (飲み物)
身体面で配慮 してほしいこと	
いま の も く ひ ょ う	

図12 改良した「プロフィールシート」のフォーマット

(2) 「こどもの発達相談」での活用

ア リーフレットの作成

本センター「こどもの発達相談」で、より広く活用していくことをめざし、保護者向けのリーフレットを作成した(図13)。リーフレットの作成に当たっては、「すこやかサポートファイル」を作成する上での考え方及び先に行った実践事例での保護者へのファイルの説明内容を基にした。リーフレットには、保護者に対して、ファイルを使うことのメリットやファイルに記述する内容を、分かりやすく記載した。合わせて、フォーマットシートの記入例として、子どもにかかわる関係者が、より多く共有することが考えられる「プロフィールシート」と「領域別サポートシート」を用意した。

リーフレット及び記入例は、主に園等との連携が期待できる相談事例の中で紹介し、配布した。



図13 保護者向けのリーフレット

イ 「すこやかサポートファイル」に寄せられた感想

「すこやかサポートファイル」を活用する保護者から、「園の先生はとてもよく見てくれているが、次の引継ぎがうまくいくか、今から心配している。連絡ノートとは違うこうした

引継ぎのファイルがあるとよいと思う」「今、どういうことに重点を置いてどのようにかかわったらよいか分かりやすいので、とても助かる」などの感想が得られた。このことから、発達が気になる子どもの保護者が望むこととして、子どもが通う園の中であっても、その引継ぎや連携がうまくいってほしいことや、今どのようなことが課題でどのようにかかわったらよいかを知りたいことが推察できた。すなわち、子どもへのかかわり方や指導の方法が変わらないでほしいという願いとともに、「すこやかサポートファイル」を、保護者が進んで子どもの引継ぎを行ったり課題を確認したりすることができるツールとして感じてくれたと受け止めることができた。

VII 研究のまとめ

1 成果

(1) 保護者及び園、本センターの協働的な相談・療育支援

本研究では、乳幼児期の発達が気になる子どもを取り巻く保護者及び園、本センターが、子どもに関する情報を共有することを通して、協働的な相談・療育支援をめざすことを目的として取り組んできた。具体的な実践としては、保護者及び園の担任、相談担当者の三者が、子どもの望ましい発達を促すことをめざしたかかわり方を話し合い、「すこやかサポートファイル」で情報を共有し、それぞれの専門的な立場を生かしながら、同じ方針で子どもにかかわってきた。それにより、保護者と園の担任とが「ここに力を入れている」という優先的に取り組む課題を意識して相互に話題にしたり子どもにかかわったりすることができた。その結果、実践事例にあげた「以前より食べられるようになったり」「登園後の排泄ができるようになったり」したという子どもの変容につながったと考えられる。このことはすなわち、子どものことを「ともにはぐくむ」といった協働的な支援が、子どもの成長を促すきっかけになったと考える。

(2) 「すこやかサポートファイル」による情報の共有

本研究における協働的な相談・療育支援のための具体的な手だてとして、保護者が管理・保管する「すこやかサポートファイル」を作成し、活用してきた。このファイルは、子どもが見せる姿に対する保護者の不安や願いを基に、話し合いを通して、子どもにとって当面のめざす目標と現在の優先的な課題に対するよりよいかかわり方が記載されることから、乳幼児期の子どもに対する支援計画につながるものと考えている。

具体的には、「いまのもくひょう」「子どもの姿」「かかわり方」を記述するようにしたこと、子どもにかかわる支援者が、ファイルを見て共通した方針でかかわることができた。また、あれもこれもというように情報を盛り込むのではなく、優先的に取り組む課題に絞り込んだことで、相談場面でも、ファイルに記述した内容を中心に話げできた。何より保護者や園においては、必要な情報を絞り込んだことで分かりやすさを実感してもらえたと考える。

事例1、事例2では、それぞれ園が独自の連絡ノートを用いて、家庭と細かな連絡を取り合っていた。このノートは、園が本事例の対象児の家庭に対し、個別的な配慮として導入しており、行事への参加の様子や園での生活全般に関する様子等、具体的日常的な内容についてのやりとりを行っている。ただ、このノートは、年度の終わりにはすべて家庭に返しているとのことであった。連絡ノートには、具体的実的なやりとりによる細かい成長のあしあとが記述されるが、引継ぎや連携を行う上ではその情報量の多さから機能的とは言い難い。やはり、かかわる上できっかけとなる子どもの情報やかかわり方そのものの情報などは、次の担任や療育担当者とは共有できる「すこやかサポートファイル」が必要になると考える。

2 課題

(1) 保健・医療、福祉等の関係機関との連携

本研究では、「すこやかサポートファイル」を活用する対象として、子どもの保護者、園、本センターの三者としつつも、このファイルがめざす情報の共有モデルとして保健・医療、福祉等に活用の対象を広げていくことを考慮して取り組んできた。保護者、園、本センターのいわゆる教育分野でのファイルの活用については、前述したとおりの成果をみたが、本研究では他の関係機関との連携には至らなかった。今後は、乳幼児期にある発達が気になる子どもの成長を支える保健・医療、福祉等の関係機関との連携の在り方を検討するとともに、保護者の理解を得ながら、各関係機関と積極的な連携を試みていく必要があると考える。

(2) ファイルの継続的な見直しと追跡調査の必要性

「すこやかサポートファイル」を実際の相談事業で使い始めて半年が経とうとしている。現在、家庭の理解のもとで使用する相談ケースも少しずつ増えてきている。今後、ファイルを使う中で、必要に応じて、再度見直し、改良を加えていくことにより、よりよい連携に向けたファイルができればよいと考える。例えば、本研究においては、「こういうかかわり方をしたら、こういうことができるようになった」といったいわゆる評価については、フォーマットシートに入れなかった。これについては、今後、このファイルが使われる範囲が、例えば、園と家庭以外にも広がりを見せていった際、評価を残すことを検討する必要性がでてくるかもしれない。そうしたよりよい連携を図る上での見直しを継続的に図っていく必要があると考える。

また、本研究におけるファイルを使う研究対象は、保育所、幼稚園に通う乳幼児期にある子どもとした。そのため、長期的な視点に立つファイルの妥当性については、ファイルを使う乳幼児期の子どもが学校に入学し、それまでの支援等の情報をその後の指導・支援にどのように生かしたかという観点で調査することにより、本当の検証が行われるのではないかと受け止めている。すなわち、より広く活用することをめざすとともに、継続的な追跡調査が必要であると考える。

3 提言 ～「個別的教育支援計画」策定に向けて～

今回、相談機関である本センター「こどもの発達相談」が、乳幼児期の子どもを支援する情報共有ファイルを試行的に開発し、活用した。この実践的な取組は、乳幼児期から始まる個別的教育支援計画に対する一つのモデルケースになるのではないかと考えている。

現在、「今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）」で提言された「個別的教育支援計画」について、議論や検討が行われている。例えば、乳幼児期から始まる個別的教育支援計画について、東京都では、乳幼児期の療育プログラムと学齢期の個別指導計画を繋ぐ「就学支援計画」を検討している。また、埼玉県では、乳幼児期は、障害の種類や程度を整理し、幼児教育や教育相談、就学に必要な教育的支援の方向性を盛り込むことが必要であるとしている。こうした内容は、現段階においてはガイドラインであり、具体的実地的な導入及び定着、そして充実をめざす上では、その考え方を基にしたより多くの実践的な研究の成果を待たなければならない。今後、障害者基本計画の重点施策実施5か年計画に示された行動計画にのっとり、個人情報保護しつつ、本人や保護者の理解の基、乳幼児期における就学前の支援計画や学校における支援計画への連携の在り方が議論されていくことが予想できるが、子どものすこやかな成長に向けて、よりよい連携を図り、それぞれの専門性を生かして働きかける協働の範囲を広げていくことが望まれていると考えている。

本研究で開発した「すこやかサポートファイル」を活用した子どもが入学する際、保護者の理解や同意のもと、このファイルの提示を行うことで、それまでの子どもへのかかわりを最大限生かした取組が行われることを期待したい。

<参考文献>

- ・文部科学省初等中等教育局特別支援教育課 『21世紀の特殊教育の在り方について（最終報告）～一人一人のニーズに応じた特別な支援の在り方について～』 21世紀の特殊教育の在り方に関する調査研究協力者会議（2001）
- ・文部科学省初等中等教育局特別支援教育課 『今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）』 特別支援教育の在り方に関する調査研究協力者会議（2003）
- ・小笠原 愈 著 「乳幼児から学校卒業後までの一貫した相談支援の在り方」『特別支援教育 NO.4』 東洋館出版社（2001）
- ・渥美 義賢 他著 「研究のまとめと情報交換方法の提案」『平成10年度特別研究成果報告書「自閉症児の早期療育・教育における連携システムに関する研究」』 国立特殊教育総合研究所（1999）
- ・石橋 剛、寺崎 裕志 著 「山口県における地域での連携の事例」『平成10年度特別研究成果報告書「自閉症児の早期療育・教育における連携システムに関する研究」』 国立特殊教育総合研究所（1999）
- ・坂井 聡 著 「サポートブック作りを勧める」『月刊 実践障害児教育 vol341』 学研（2001）
- ・東京都心身障害教育改善検討委員会 『これからの東京都の特別支援教育の在り方について（最終報告）～一人一人のニーズに応じた教育の展開をめざして～』（2003）
- ・埼玉県特別支援教育振興協議会 『ノーマライゼーションの理念に基づく教育をどのように進めるかについて（検討結果報告）』（2003）
- ・障害者施策推進本部 『障害者基本計画 重点施策実施5か年計画』（2002）

なお、本研究を推進するにあたり、その基礎研究として、以下の文献等を参考にした。

- ・厚生労働省社会・援護局 障害保健福祉部 企画課 『「国際生活機能分類－国際障害分類改訂版－」（日本語版）の厚生労働省ホームページ掲載について』（2002）
- ・中川 信子 著 『健診とことばの相談』 ぶどう社(1998)
- ・高松 鶴吉 著 『療育とはなにか』 ぶどう社(1990)
- ・宮田 広善 著 『子育てを支える療育』 ぶどう社(2001)
- ・東京発達相談研究会 浜谷 直人 編著 『保育を支援する発達臨床コンサルテーション』 ミネルヴァ書房(2002)
- ・船越 知行 編著 『障害児早期療育ハンドブック』 学苑社(1996)
- ・上月 正博 著 「特別支援教育への転換」『特別支援教育ほっかいどう創刊号』 北海道立特殊教育センター(2003)
- ・齊藤 宇開 著 「個別の教育支援計画って何？」『月刊実践障害児教育 8月号 Vol.362』 学研(2003)
- ・文部科学省初等中等教育局特別支援教育課 「今後の特別支援教育の在り方について」『季刊特別支援教育 No.10』 東洋館出版社(2003)
- ・柘植 雅義 著 「個別の教育支援計画について」『はげみ10・11月号特集「こう変わる“特殊教育”」』 日本肢体不自由協会(2003)